

経済観測

東大のキャンパスは、最近の晴天続きでセミの大合唱が続いている。朝早くキャンパスを歩いているとセミの抜け殻や、短い命を終えた亡きながらがここに転がっている。

東京もいたるところが舗装されて、大学キャンパスやまとまった広さの古木を残した公園でないと、セミの合唱も聞かれなくなつた。風物詩がひとつ失われたような気がす

セミ

る。

キャンパスには、鳴き声と亡きがらから判断して、大半がアブラゼミ、それに少数派ではあるがミンミンゼミがいる。これは昔と変わらぬ。十数年前、子供が小さかったころ、近くの公園で、虫かごいっぱいアブラゼミとミンミンゼミを採ってきたりしていた。ただ、もっと昔は、東京には、ニイニイゼミもツクツクボウシもヒグラシも多くいたような気がする。生物多様性の観点からは、まことに残念な状況だ。

東京大教授

伊藤 隆敏

セミは長距離は飛べないし、羽化まで何年も地中で過ごすので生息域の変化は小さいし、環境への適応力もあまりないように思われる。たとえば、八丈



高の高い山の中に生息していて、平地にはいない。一方、関西や九州では普通に見られるクマゼミは北海道には生息しない。

共存するセミの種類の間でも、時代を通じての増減があるようだ。それが、地球温暖化なのか、植物の移植などのせいなのか、論争があるようだ。

島にはセミといえば、ツクツクボウシしかないということだ。札幌では、初夏の森へいくと、「エゾハルゼミ」をよくみかける。このセミは本州では標

松尾芭蕉が貞享5年（1688年）岐阜県で聞いたセミはどのセミだったのだろうか。撞鐘（つりがね）も響くやうなり蟬（せみ）の声——松尾芭蕉